

## 選ばれる言語聴覚士学科であるためには

～他医療関連職種大学1年生へのアンケート調査をもとに(第2報)～

竹内 洋彦<sup>a)</sup>

a 長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

## To be selected by students, what should we do?

Hirohiko Takeuchi<sup>a</sup>

a Department of Speech-Language-Hearing Therapists, Nagano Medical Hygiene College

要旨：我々言語聴覚士学科の学生募集活動においては、また有為な若い力を言語聴覚療法の現場に数多く迎え入れるためには、言語聴覚士という仕事を知ってもらい、その魅力に気付いてもらうことが重要である。そのためには、現状どの程度、どのように知られているのか、どのようにみられているのか、そしてどのような情報が求められているのか、についての情報を得た上で行動していくことが重要と考える。そのための調査を、昨年に引き続き、近接する専門職を選んだ学生(1年生)を対象として調査を行った。今年度は2つの大学において調査を行った。今年度も簡単な質問ではあったが、量的データの分析を通して、言語聴覚士の認知度や、進路選択において必要とされる情報などについて、我々の学生募集活動の方向性にも資する結果が得られた。

キーワード：言語聴覚士養成、医療関連職種、高校生の進路選択

### はじめに

医療現場を舞台としたドラマなどで言語聴覚士(以下、ST)が出てくることが増えてきた。今年度であれば、「アンメット-ある脳外科医の日記-」(フジテレビ系列)の初回に失語症患者とともにSTが登場したり、連続テレビ小説「おむすび」(NHK)で管理栄養士として働き始めたヒロインが参加する栄養サポートチームのメンバーとしてSTがいたり、といった具合である。少しずつ

ではあるが、STも「普通の仕事」として認識され始めてきているようではある。

とは言え他の医療関連職種に比べると依然として認知度の低い職種であり、認知度の向上は取り組む続けるべき大きな課題である。その際重要なことは現状を的確に知ることであり、「STを選ばなかった人たち」に「なぜ選ばなかったのか?」を教えてもらうのは有益な情報となり得

---

a 長野医療衛生専門学校

〒386-0012 長野県上田市中央2-13-27

takeuchi@nagano-iryousei.ac.jp

る。具体的には、STを選ばずに近接領域の医療関連職種の養成課程に進んだ学生達への調査である。それにより、STがどのように認知されており、選ばれなかったのはなぜか、について知ることができる。そのような考えから、成田会・研究ジャーナル前号において調査結果に基づく報告を行っている<sup>1)</sup>。そして今年度もそれに引き続き学外のSTの協力を得て、看護師・理学療法士(以下、PT)・作業療法士(以下、OT)の大学1年生を対象とした調査を行った。

## 方 法

信州大学医学部附属病院言語聴覚士寺島さつき氏の協力を得て、「リハビリテーション概論」を受講している下記の2つの大学学科の1年生を対象に調査を行った。

- ・ A大学医学部保健学科(看護学、理学療法学(以下、PT)、作業療法学(以下、OT)の各専攻)
- ・ B大学保健科学部看護学科、同学部リハビリテーション学科(PT専攻、OT専攻)

質問項目は、

- ・ 専攻科について
  - ・ 大学入学「前」、STという職種を知っていたか。
  - ・ (STを知っていた学生に)どの程度STについて知っていたか。
  - ・ (同)どのような経緯で知ったか。
  - ・ (同)STよりも現在の職種課程を選択したのはなぜか。
  - ・ (STを知らなかった学生に)STという職種を入学前に知っていたらSTを選んでいたと思うか。
  - ・ 将来の職業選択を考える上でどのような情報があると嬉しいと思うか。
- である。

調査はいずれもグーグル・フォームを通じて行った。調査時期は2024年11月、回収率は100%だった。

## 結果と考察

### 1. 調査の概要

両大学における回答者の所属専攻は表1の通り。回答者数に大学間で大きな差はなかった。またそれぞれの専攻ごとの回答者数も同様である。以下、回答内容(調査結果)について概括していくが、専攻間で両大学それぞれで類似した傾向(専攻間の差)がみられた一方、大学間における差は一部を除いて認められなかった。そのため、大学ごとの結果はまとめず、両大学の3つの専攻ごとにまとめて傾向を見ていくこととする。

表 1. 大学・専攻ごとの回答数

| 大学  | 専攻    | 回答数 |
|-----|-------|-----|
| A大学 | 看護学   | 58  |
|     | 理学療法学 | 18  |
|     | 作業療法学 | 18  |
| B大学 | 看護学   | 52  |
|     | 理学療法学 | 20  |
|     | 作業療法学 | 18  |

### 2. 大学入学「前」、STという仕事について

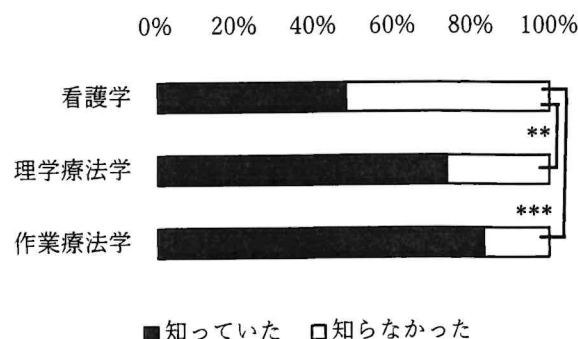


図 1. 大学入学「前」、STを知っていたか。

入学前の認知度については、専攻ごとに大きな違いがあり、知っていたのは看護学専攻では

53人(48.2%)と知らなかった学生の方が多かったのに対し、PT専攻では28人(73.7%)、OT専攻では30人(83.3%)だった。

看護学専攻に比べて、リハビリ専門職(PT専攻、OT専攻)の方が認知度が高かった(看護学専攻とPT専攻では $\chi^2=7.413$ 、 $p<.01$ 、看護学専攻とOT専攻では $\chi^2=13.66$ 、 $p<.001$ )。やはり同じリハビリ専門職ということで、専攻を検討するに当たって、認知した可能性が大きいと言える。

昨年度はA大学のみの調査だったが、知っていた率は、看護専攻35.9%、PT専攻55.0%、OT専攻78.9%であり、各専攻とも上昇基調であるとは言えよう。

3-1. STを「知っていた」方に質問です。どの程度STについて知っていましたか？

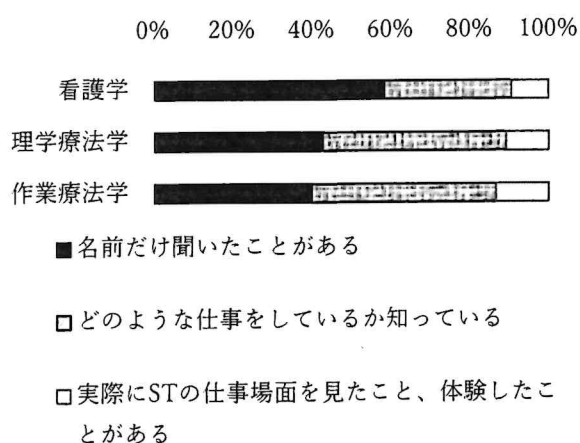


図2. どの程度STを知っていたか。

「名前だけ」よりは他の2つの選択肢の方がより詳しく知っていることになるが、認知度と同様に、看護学専攻に比してリハビリ専門職の方が知っている程度は高い傾向は認められた。しかし、認知度程の明確な差ではなく、やや詳しいという程度に留まっている。

4. STを「知っていた」方に質問です。どのような経緯で知っていましたか？(複数選択可)

この項目については、専攻ごとの差は一部を除いて認められなかったため、全体の数字で示していく。上から3項目が予めこちらで設定した選

択肢で、その下6項目が自由記述で得られた回答である。自由記述の回答中で、質問の趣旨からみて選択肢への回答に含めて良いと考えられた回答については、選択肢への回答に含めた。

表2. どのような経緯でSTを知ったか。

| 経緯                            | 人数(%)     |
|-------------------------------|-----------|
| 家族等がSTを受けたことがある               | 8 (7.2)   |
| 高校の進路相談や指導にて知った               | 52 (46.8) |
| メディア(テレビドラマ、ドキュメンタリーなど)で知った   | 37 (33.3) |
| 友人がSTを目指している                  | 5 (4.5)   |
| 大学の他の講義で出て来た                  | 5 (4.5)   |
| 職業選択をする際に、様々な医療職を調べ、その過程で知った。 | 4 (3.6)   |
| 職業体験で知った                      | 3 (2.7)   |
| 自分が入院したときに他患が受けていた            | 2 (1.8)   |
| 医療関連職種である家族から聞いた              | 2 (1.8)   |

こちらで設定した選択肢への反応については、昨年度と大きな変動はなかったが、自由記述の回答のうち、計5名にも上った「友人がSTを目指している」は昨年度にはなかったものであった。

専攻別で見えていったときに1点だけ際立った対象を示したのは「高校の進路相談や指導にて知った」で、看護専攻17人(32.1%)、PT専攻14人(50.0%)、OT専攻21人(70.0%)と専攻ごとに大きな差が認められ、特に看護とOT間では有意差も認められた( $\chi^2=11.1$ 、 $p<.001$ )。

昨年度も指摘したが、高校の進路指導レベルではSTの将来性は良く理解されている面があり、高校訪問の折にも、医療関連職種、特にリハ職に興味を持つ生徒にはSTを勧めたりすると言って下さる先生もおられる。そのような先生でも「でもPTを志望する生徒って実際に自分がPTを受けて志望することが多いので、それ以外の職種に目を向けてくれないんですよね」ともおっし

やる。リハ職志望の生徒に同じようにSTについて情報提供してもPT志望の生徒には残りにくいというのが、PT専攻とOT専攻における「高校の進路相談や指導にて知った」の20%の差なのかもしれない。

3-2. STを「知っていた」方に質問です。STよりも現在の職種課程を選択した理由を教えてください。（複数選択可）

この設問(複数選択可)には、昨年度は回答者の9割以上が「選択した職種(理学・作業・看護)が目指したい職業だったから」と答えたが、今年度はそこまではっていない。またこの設問に関しては大学間でやや差があり、「選択した職種(理学・作業・看護)が目指したい職業だったから」と答えたのはA大学では48人(82.8%)だったのに対し、B大学では37人(69.8%)だった。この差は有意差こそ認められなかった( $\chi^2=3.242$ ,  $p=0.072$ )ものの、有意確率から傾向としては認められた。

この背景にあるものについては、回答から探っていきたい。

表3. STよりも現在の職種を選択したのはなぜか。(人(%))

|                               | A大学      | B大学      |
|-------------------------------|----------|----------|
| 選択した職種(理学・作業・看護)が目指したい職業だったから | 49(84.5) | 37(69.8) |
| STの仕事のイメージがわきにくく、よくわからなかったから  | 8(13.8)  | 7(13.2)  |
| 長野県は大学に言語聴覚学科の養成課程がないから       | 2(3.4)   | 13(24.5) |

大学ごとの選択肢への回答は表3の通りであるが、際立った違いは「長野県は大学に言語聴覚学科の養成課程がないから」への回答に現れている(Yatesの連続性の補正後、 $\chi^2=8.803$ ,  $p<.01$ )。B大学では、4人に1人程度は県内に大

学課程でのST養成校があれば(国公立か否かを問わず)進学していた可能性があるのに対して、国(公)立の大学がなかったからST養成には進まなかったとした回答者がA大学で2人いた。両大学の学生はいずれも4年制大学を進学先の前提と考えている点では共通しているが、国公立か私立かという設置主体の違いが回答傾向の差となって現れたものと考えられる。

4. STを「知らなかった」方に質問です。STという仕事を入学前に知っていたら…

次にSTについての概論を受講した、入学前にはSTを知らなかった学生に対して「もし入学前にSTを知っていたとしたら、職業として選択していたと思うか」を問うてみた。結果は表4に、大学ごとにまとめてある。やはり「今の選択した職種(理学・作業・看護)を選択する」が最多ではあり、大学間の差も10ポイント程度の差に留まっている。

表4. (STを知らなかった学生向け)STを入学前にもし知っていたら。(人(%))

|                         | A大学      | B大学     |
|-------------------------|----------|---------|
| 今の選択した職種(理学・作業・看護)を選択する | 30(83.3) | 3(8.3)  |
| 将来の仕事としてSTを選択していた可能性がある | 27(73.0) | 7(18.9) |

5. 将来の職業選択を考える上でどのような情報があると嬉しいと思いますか？(複数選択可)

この問への回答は一部を除いて大学間、専攻間の差が認められなかったので、まとめて表示する。予め用意した選択肢は昨年度同様の5つ(複数選択可能)、すなわち「職業の具体的な仕事内容」「職業見学の機会」「就職のしやすさや求人状況」「実際の働き方」「賃金や給与」である。これらについては、昨年度と全く同様の傾向

だった。それぞれ高い割合で選択されてはいるが、S Tが売り物にしている「就職のしやすさや求人の状況」は5つのうち最低で、選択肢の中で唯一半数以下だった点も昨年度同様である。ただしこれについては専攻間の差が存在し、看護専攻で37.3%、O T専攻で33.3%だったのに対し、P T専攻は57.9%と高かった(O Tとの間で $\chi^2=4.490$ 、 $p<.05$ )。リハ職種の中では既に就職のし難さが囁かれているP Tだが、求人状況を気にしつつ、それでもP Tを志す複雑な胸中を反映しているとも言えそうである。

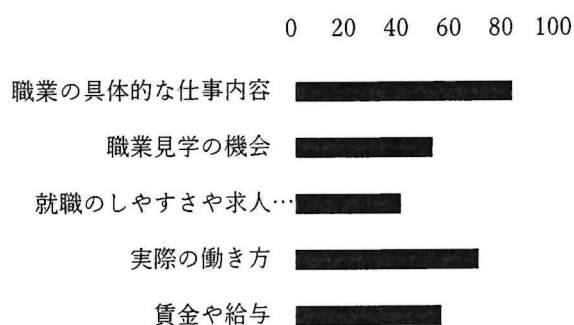


図3. 職業選択にあたって欲しい情報は？(%)

自由記述の回答は、「どのような患者さんがどのように変わったかなど自分がその仕事をして何ができるかのイメージができるといいと思う(A大学・看護)」「知名度(A大学・P T)」「やりがい(A大学・O T)」「働いている人の体験談(B大学・看護)」「その職業に未来がしっかりあるか(AIに奪われないなど)(B大学・O T)」などだった。

## 提言に代えて

### 1. STをどう知ってもらうか。

昨年度の調査では、大学入学前にS Tを知っていたのは全体で47.6%と半数以下だったが、今回は60.3%と高かった。高校の進路指導場面で、指導担当の先生からS Tについての情報提供がそれなりにあることが明確だが、当校でも高校訪問を通してアピールを継続していくことは意味があ

るものと考えられる。

ただし進路担当の先生に推してもらったとしても、実際に生徒本人がS Tから直接話を聞いたり、現場を見たりする経験はやはり強力なはずである。今回「実際にSTの仕事場面を見たこと、体験したことがある」と答えた学生は、全体では10.8%だった。これを高いとみるか低いとみるかは難しいところではあるものの、少なくともこの率を上げていく努力が必要ではある。やはりこの領域については、長野県言語聴覚士会などの職能団体との協力・連携が必要と考える。

当校では、学科や資格を知ってもらうために、年に何回かオープン・キャンパスを行っている。これについては一定の効果はあるものとみられているが、それにしてもまずはそのオープン・キャンパスにつながらないことには始まらない。基本的にはS Tとしての一般的な知名度・認知度が上がる必要があるが、それについては関係者も長年努力してきたところであり、また向上させるための要因も複合的であるため、ここでは触れることを避けた。ただし冒頭にも述べたように、最近ではドラマ等で登場することも増えてきており、良い流れではあるように感じられる。

### 2. どうであつたら、S Tを進路として選択していたか。

昨年度は今回のA大学の学生のみを対象に調査を実施したが、進学前にS Tという職種を知っており、かつ選考の選択理由として「選択した職種(理学・作業・看護)が目指したい職業だったから」とは回答しなかった(一定の条件が満たされていれば、現在の進路ではなく、S Tへの道を選んだ可能性が大きい)学生が4人おり、その回答としては、

- ・長野県は大学に言語聴覚学科の養成課程がないから(O T 3人)

- ・私立大学しかなかったため。(看護)

だった。今回は直接「長野県は大学に言語聴覚

学科の養成課程がないから」と問う選択肢を設定したところ、7人が選択した。それに「国(公)立の養成課程がないから」と答えた2人を加えると、総計184人の約5%となる。最終的に作業療法を志した生徒のうち半数近くが県内に大学でのST養成施設がないことでSTを選ばなかったり、国(公)立のST養成大学が県内にないために、医療関連専門職に興味のある生徒のうち20人に1人がSTを選ばなかったかもしれない、というのは驚くべきことである。

### 3. 我々はどのようにアピールしていくべきか。

さてそれでは、今の高校生に合わせて、どのようにアピールをしていけば良いのだろうか。

今回の調査では前回と同様に、職業選択に向けて欲しい情報とされたのは、「具体的な仕事内容」が最も高率であり、そこを高校生等に届くよう発信していくことが依然として重要であることが判った。次いで「勤務状況・雇用形態」(70.1%)、「賃金や給与」(56.0%)と続いたが、これらに次ぐ「職業見学の機会」では、専攻ごとにやや差が見られた。看護専攻では45.5%だったが、PT専攻では65.8%、OT専攻では61.1%と差が認められたのである(看護専攻とPT・OT専攻合算で $\chi^2=5.778$ ,  $p<.05$ )。やはりリハビリ専門職種に興味を抱いて情報収集をしたいと考えたときには、実際に現場を見学するのが最も判りやすいし、養成校側の視点で考えてもミスマッチを防ぐのにも有効であると考ええる。新型コロナ以前は、高校生対象に夏休みなどの期間に病院の現場を見学してもらう活動が県士会で行われたりしていた。特にリハビリ専門職種に興味のある高校生にとっては、具体的に現場を見る機会が必要とされていることが判るデータと言えそうである。感染対策の観点から難しいのかもしれないが、やはりその重要性を踏まえた上での検討が必要であろう。

高校生と保護者を対象とした進路に関する意識調査<sup>2</sup>によると、高校生の83%、保護者の89%が進路について「話す」としており、親子でよく話し合っている様子がうかがわれ、その際に保護者がよく使う言葉としては「自分の好きなことをしなさい、やりたいことをやりなさい」が突出して多く、また増加傾向であるともされる。保護者は高校生本人の判断や主体性を最大限尊重したいとのことと考えられるが、であればなおのこと、高校生に希求される形で情報提供していくことが非常に重要になる。

最後に最近の数字から、我々にとって明るい読み取れるものにも触れておきたい。前回の報告では、文部科学省による学校基本調査<sup>3</sup>に基づいて「大学学部在学者数は291万8千人と過去最多だったのに対し、専門学校は60万七千人(学校数は23校減)で、大学への志向は根強い」とした。実際今回の調査でも4年制大学でのST養成が指向されていることが明らかではあったが、同じ調査の最新結果<sup>4</sup>によると、大学学部在籍者数は前年より4,500人減少している一方で、令和4年(22.5%)、5年(21.9%)と低下し続けてきた専門学校への進学率が令和2年・3年と同じ24.0%に反転した(実数では前年より2,900人の増加)。

また高校生の進路意識と進路選択に関するアンケート調査<sup>5</sup>では、大学・専門学校での志望校選びの際に重視するポイントとして、1位が「学べる内容」、2位が「取れる資格」だったが、2位はこれまでは「学部名・学科名」だった。大学・専門学校を選ぶ際にブランドやラベルではなく、実質的なものを重視していることであり、我々にとっても良い流れではないかと考えるものである。

### 謝辞

今回の調査を、実際に大学生に対して実施して下さった、信州大学医学部附属病院 リハビリテ

ーション部 言語聴覚士 寺島さつき氏に心から感謝致します。

#### 利益相反の開示

本論文の筆者について利益相反はない。

#### 文 献

- 1 竹内洋彦. 選ばれる言語聴覚士学科であるためには ～他医療関連職種 1 年生へのアンケート調査をもとに～. 成田会・研究ジャーナル. 2024; 5: 15-20.
- 2 一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会, 株式会社リクルートマーケティングパートナーズ. 高校生と保護者の進路に関する意識調査合同調査, 2024.

[https://souken.shingakunet.com/research/assets/2023\\_hogosha3.pdf](https://souken.shingakunet.com/research/assets/2023_hogosha3.pdf) (最終アクセス: 2025.3.5.)

- 3 文部科学省. 令和 3 年度学校基本調査(確定値)の公表について, 2023.
- 4 文部科学省. 令和 6 年度学校基本調査(確定値)の公表について, 2024.  
[https://www.mext.go.jp/content/20241213-mxt\\_chousa01-000037551\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241213-mxt_chousa01-000037551_01.pdf) (最終アクセス: 2025.3.5.)
- 5 株式会社マイナビ未来応援事業本部マイナビ進学総合研究所. 高校生の進路意識と進路選択に関するアンケート調査, 2024.  
[https://souken.shingaku.mynavi.jp/wp-content/uploads/2024/09/202405\\_高校生の進路意識と進路選択に関するアンケート調査\\_調査レポート.pdf](https://souken.shingaku.mynavi.jp/wp-content/uploads/2024/09/202405_高校生の進路意識と進路選択に関するアンケート調査_調査レポート.pdf) (最終アクセス: 2025.3.5.)